

平成30年6月23日現在

機関番号：34701

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K16837

研究課題名(和文)『愚管抄』の文献学的研究

研究課題名(英文)A Philological study on Gukansho

研究代表者

坂口 太郎 (SAKAGUCHI, TARO)

高野山大学・文学部・助教

研究者番号：50724142

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：『愚管抄』の原態を復原するため、複数の写本類について、文献学的な調査を行なった。その過程で、文明本・東山御文庫本などが重要な写本であることに気づき、従来の校訂本の誤りを数多く訂正することができた。また、これまで注目されていなかった古筆切が、『愚管抄』の校訂に有益であることが判明した。さらに、慈円の著わした『本尊釈問答』などを発見し、『愚管抄』の成立過程を解明する上での重要なヒントを得ることができた。

研究成果の概要(英文)：I philologically researched Multiple Manuscripts for the restoring the original form of "Gukansho". Through that process, I noticed that the Bunmei text, Higashiyama-Obunko text etc are important manuscripts, and I was able to correct many mistakes in conventional revised editorial books. Also, it was proved that the kohitsu-gire which was not noticed so far is useful for the revision of "Gukansho". In addition, I found an important Document such as "Honzon-shaku-mondo" written by Jien, and gained important hints on elucidating the process of establishing "Gukansho".

研究分野：日本中世史

キーワード：『愚管抄』 慈円 史籍 校訂 古筆切 延暦寺 青蓮院吉水蔵聖教 『本尊釈問答』

1. 研究開始当初の背景

慈円の著した『愚管抄』については、三浦周行「愚管抄」(『日本史の研究』岩波書店、1922年。初出1920年)や村岡典嗣「愚管抄考」(『増訂 日本思想史研究』岩波書店、1940年。初出1927年)以来、成立年代、慈円の歴史観、個別記事の吟味に関する究明が進められてきた。

戦後に入ると、政治史・思想史・文化史などの諸領域で『愚管抄』を利用して成果を挙げる論著が次第に増え、『愚管抄』の持つ重要性は学界全体に広く認知されるようになった。ただし、1970年代以降の研究は、『愚管抄』を利用する際、通行の活字本に依拠するものが大多数であり、かつて1960年代までの研究者が重視していた写本に立脚した文献学的な研究方法は欠落している。

とくに、取り組むべき課題は、『愚管抄』の本文校訂である。現在、多くの研究者がよく利用する『愚管抄』の本文は、岡見正雄・赤松俊秀校注『日本古典文学大系 86 愚管抄』(岩波書店、1967年、以下、「古典大系本」と略する)であるが、刊行から既に50年以上を経過しており、現段階の学問的水準を踏まえつつ諸写本に目を配った再校訂が必要である。最近では、国文学研究資料館が『愚管抄』の本文データベースを公開しており、パソコンによる検索機能を活用した研究方法も可能となったが、その底本は古典大系本であるため、厳密な研究を行う上ではやはり不足がある。

2. 研究の目的

研究代表者は、かねてより『愚管抄』の研究を前進させるためには、写本の厳密な校勘に基づく、文献学的研究が不可欠であると考えてきた。『愚管抄』の写本については、古く村岡典嗣「愚管抄の著作年代編制及び写本」(『増訂 日本思想史研究』岩波書店、1940年。初出1939年)によって先駆的な検討が行われ、さらに1950年代に塩見薫氏が文部省科学研究費を受けて多くの写本を調査し、

精密な校訂作業を行っている(「愚管抄のカナ(仮名)について」[『史林』第43巻第2号、1960年])。また、1967年に岡見正雄氏・赤松俊秀氏によって、新出の島原本を底本とする古典大系本が公表され(前掲)、現在一般に広く利用されている。

しかし、近年の研究は、古典大系本に依拠する余り、諸写本の異同に注意を払うことは少ない。かつて塩見薫氏は、『愚管抄』の本文を復原するためには、諸写本の綿密な精査が必要であることを鋭く指摘したが、塩見氏の早すぎる死によって、その作業は惜しくも中絶してしまった。古典大系本でも、数種類の写本を校訂に用いているが、塩見氏の研究に比べると、精密さに欠ける点もある。すなわち、『愚管抄』の研究を進めるためには、塩見氏の提言を踏まえたと、新たな視点から『愚管抄』の諸写本を調査し、本文校訂を行う事が喫緊の課題となるのである。

『愚管抄』の写本系統には、片仮名本と平仮名本の二系統がある。また、一般に知られていないが、『愚管抄』の古写本の断簡も古筆切の形で数点伝わっている。古筆切に見える本文は、『愚管抄』の原態に近い本文と考えられ、校訂を進める上で、大きな手掛かりとなる。さらに、諸写本を調査し、厳密な校訂を行うことで、『愚管抄』の研究を進展させ、成立過程についても文献学的なアプローチを行いたい。

3. 研究の方法

(1)【『愚管抄』の諸写本の調査と校訂】

以下に示す『愚管抄』の主要写本と古典大系本(底本:島原本)を対校する。各所蔵機関に紙焼写真の頒布を申請し、写真にもとづいて重要な箇所から校訂を開始する。

対校に使用する『愚管抄』の写本

(括弧内は、所蔵者)

片仮名本系

文明本(宮内庁書陵部)

阿波国文庫本(東大文学部国語学研究室)

平仮名本系

東山御文庫本（京都御所東山御文庫）
彰考館本（彰考館）
河村本（名古屋市鶴舞図書館）
天明本（静嘉堂文庫）

また、従来の『愚管抄』研究で見逃されていた古筆切についても写真を収集し、校訂に際して適宜参照する。

検討作業を行うにあたっては、片仮名・平仮名・漢字などの表記の異同に注意を払うほか、内部徴証によって本文批判を行い、誤字・脱字・衍字を訂正する。あわせて、慈円が『愚管抄』の執筆時に参照した年代記である『簾中抄』や、『玉葉』を始めとする古記録を参照して、『愚管抄』の本文を精密に検討する。

（２）【『愚管抄』関係史料の収集】

慈円の書状・著作・和歌などを収集し、『愚管抄』に関係する記事を検討する。とくに、『愚管抄』の成立・修訂をめぐる過程について、未刊の聖教類を素材として再検討を加える。

（３）【慈円研究文献目録の作成】

明治時代以降における慈円研究の軌跡を探り、既往の研究の問題点を把握すべく、関係する学術論文の網羅的収集を行ない、これらを目録化する。

４．研究成果

（１）【『愚管抄』の校訂】

現在もっとも利用されている『愚管抄』のテキストである古典大系本の校訂本文を検討した。とくに、文明本・東山御文庫本などの写真版に基づいて校訂を行なったところ、古典大系の底本である島原本に誤脱・衍字が多数確認されるほか、古典大系の句読点の打ち方に再考を要する部分が出てきた。

次に、「古典大系」が底本とした島原本は、同じ片仮名本系の写本である文明本と比較すると、漢字表記が多いため、文章が格段に読みやすくなっている。しかし、元来仮名で表記されていた固有名詞（人名など）を漢字に改変したことで、『愚管抄』の原態から大

きく乖離する結果を生じたことも否定できない。そのため、『愚管抄』成立当初の本文を復原するに当たっては、島原本よりも、文明本に優位性を認めざるをえない。

また、『門葉記抄』巻第１に引用された『愚管抄』別記の逸文を検討した。この逸文は、無動寺勸学講の創始と沿革、さらには慈円と頼朝との交流について触れた史料として知られているが、文意が通らない個所が多い。そこで、『門葉記抄』の親本にあたる、青蓮院本『門葉記』「山上勤行 2 無動寺勸学講」（東京大学史料編纂所架蔵写真帳による）を参照したところ、『門葉記抄』に見られない改行個所や越略点（中略記号）が複数あることが確認できた。すなわち、別記の逸文は、『門葉記』の編者である尊円法親王が大幅な省略を加えていたのであり、利用の際には、十分な注意を必要とする。

以上の知見については、論文「『愚管抄』校訂私考」（『古代文化』第 68 巻第 2 号、2016 年）にまとめた。

次に、従来の『愚管抄』の伝本研究では、古筆切の存在が閑却されてきた。しかし、現存する『愚管抄』の写本の書写年代が、悉く近世に降るといふ現状を鑑みるならば、中世写本の断簡である古筆切は、『愚管抄』の原態を考える上で貴重な手掛かりとなる。そこで、『愚管抄』の古筆切についての情報を収集したところ、「古筆切所収情報データベース」（<http://base1.nijl.ac.jp/~kohitu/>）に採録されている古筆切以外にも、重要な古筆切が伝存していることが確認できた。『愚管抄』研究における古筆切の重要性については、いずれ論文で私見を公表する予定である。

（２）【『愚管抄』の成立過程】

近年、『愚管抄』について数多くの論著が発表されており、同書の研究は盛況のようにも見える。しかし、これらの研究には、慈円の関係史料を幅広く収集し、慈円や『愚管抄』を立体的に考察するという姿勢に欠けるものが多い。その意味では、半世紀前の赤松俊秀氏や多賀宗隼氏らの研究水準に比べて、大

きな後退を生じていると言わざるをえない。

とくに、『愚管抄』の研究を進める上では、著者である慈円が晩年に執筆した願文や書状などの分析が不可欠である。これらについては、竹内理三編『鎌倉遺文』の該当巻に相当数が収録されているが、『鎌倉遺文』に漏れた文書も少なくない。そこで、先行研究を参照して、慈円の願文や書状の収集を進めた。また、東京大学史料編纂所に架蔵される写真帳・マイクロフィルムを閲覧し、慈円に関する史料の把握につとめた。

その際、研究代表者が心がけたのは、『愚管抄』の成立過程に関する新史料の存否であった。『愚管抄』の成立については、かつて承久の乱前と乱後の二説が対立し、熾烈な論争も繰り広げられたが、戦後の塩見薫氏や赤松俊秀氏らの研究によって、承久の乱前に成立したことが学界で認められている。

ただし、『愚管抄』の成立過程や読者対象などは未だ明らかではなく、なお究明の余地を残している。何よりも『愚管抄』を考える上では、『愚管抄』の本文を精読するだけでなく、鎌倉初期の公武両政権を中心とする政治状況への透徹した理解、青蓮院を始めとする天台宗寺院に伝来する慈円関係の聖教への十分な目配りが肝要である。

このような問題関心に基づき、研究代表者が史料調査を進めていたところ、複数の重要史料を見出すに至った。その中でも特筆すべきは、慈円の撰述にかかる『本尊釈問答』（青蓮院門跡吉水蔵聖教、東京大学史料編纂所架蔵マイクロフィルムによる）である。

『本尊釈問答』は、承久2年（1220）正月に、慈円が比叡山の無動寺大乘院において執筆した漢文体の著作である。この書物の前半部分において、慈円は建保7年（1219）に起きた源実朝暗殺事件と三寅（のちの九条頼経）の関東下向の背景に八幡大菩薩の神意を読み取るとともに、平安末期から鎌倉初期にかけての動乱の推移を纏めた上で、日本国における「主上」「執政臣」「太上天皇」「武将」の関係性についても詳細に論じている。鎌倉

幕府論を十分に展開できていない点は、『愚管抄』に比して未成熟さを示すが、反面で慈円における歴史的思考の形成を段階的に捉えることができる。

また、『本尊釈問答』によれば、慈円は「一卷道理」を記したとあり、これは『愚管抄』の原型をなした著作と考えられる。さらに、慈円の台密に対する優れた造詣、『十七条憲法』に対する深い理解、八幡大菩薩・北野天神への篤い信仰などをうかがわせるのも、『本尊釈問答』の見逃せない内容である。

以上の点については、さらに考察を深めて、論文化をめざす。また、『本尊釈問答』の翻刻についても、青蓮院門跡の御許可を得て、公表したい。

なお、この研究を進める中で、承久の乱後の『愚管抄』の書き継ぎや、慈円晩年の状況について新知見を得ることができたことも予期せぬ成果であった。とくに、九条道家の周辺において、死後の慈円が畏怖の対象とされた事実は、承久の乱後の九条家を考える上でも重要な示唆を与える。この点についても、他日論文として公表する予定である。

5．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

坂口 太郎、「『愚管抄』校訂私考」、『古代文化』第68巻第2号、古代学協会、2016、50-70、査読有

〔学会発表〕（計0件）

6．研究組織

(1)研究代表者

坂口 太郎 (SAKAGUCHI, Taro)
高野山大学・文学部・助教
研究者番号：50724142